

心理的地域支援とセンターの役割

神 澤 創

帝塚山大学心のケアセンターには、地域から求められる臨床サービスの提供と大学院生の教育研修という2つの機能が期待されており、そのどちらかに偏ることは、センター設立の趣旨に反することになります。ところがこの両者をともに充実させるのは容易なことではありません。より質の高いサービスの提供を目指すなら、熟練した臨床家だけで運営していけばよいのですが、それでは大学院生の研修の機会が確保できません。かといって学生の教育ばかりに集中すると、臨床機関としての機能がおろそかになりかねません。両者のバランスをうまくとるのはなかなか難しい作業といえます。

ありがたいことに、心のケアセンターの利用者は年々増加し、昨年度の来談者数は2403名を数えました。現在、面接実習の一環として、可能な限り教員や有資格の相談員の面接に訓練生が同席する陪席の形態をとっているのですが、来談ケースが立て込んでくると陪席する学生がなかなか見つからないこともあるようです。また新規ケースの予約も、少し順番をお待ちいただくなくてはならない場合もあります。地域からのニーズが高まるのはありがたいことなのですが、実際にはこのような不都合も生じてくるわけです。

数だけではなく、ニーズの多様化も無視できません。来談者の年齢は、就学前児童から60代までと幅広く、相談内容も学校や職場での不適応、家族の問題などと多岐にわたり、年間100件を超える医療機関からの紹介ケースの中には、うつ病や統合失調症など精神疾患の診断をお持ちの方もおいでになります。地域との連携も、これまでは学校やクリニックといった、比較的限られた範囲の人たちとのやり取りで事足りるケースが多かったのですが、今後はノートや引きこもりなど、従来の枠組みだけでは対応が難しいケースの増加が予測され、いきおい、近隣の関係機関とも今まで以上に広く、かつ緊密につながってゆかざるを得ないことでしょう。すでに、奈良県発達障害支援センター「でいあ」との協働は始まっており、これからは「若者サポートステーション」や「地域活動支援センター」など地域の支援機関との協力も必要になってくるかもしれません。

支援の方法として、センターで行う相談やグループ活動だけではなく、必要に応じてこちらから地域の現場に出かけていくアウトリーチも考えたいところです。帝塚山大学は、以前から地域の学校に学生サポーターを派遣してきた実績を持っており、心のケアセンターでも何らかのアプローチを試みる時期にさしかかっているような気がします。問題が変化すれば、支援の方法も変化していくものです。

これらの課題を乗り越えていくためには、地域における心理的支援サービス提供を通じて、一人でも多くの心理臨床家を養成してゆけるよう、センターにかかわる人すべてが知恵と力を出し合ってゆかなければなりません。これからも、地域支援と教育研修の両輪をうまく回転させていきたいものです。